みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

カナダ先住民シュスワップ：シャウェーム・ミュージアム&ヘリテイジ・パーク：歴史・文化・言葉を伝える活動拠点

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2011-03-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 鈴木, 七美
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009053

カナダ先住民シュスワップ

シャウエーム・ミュージアム&ヘリテイジ・パーク

歴史・文化・言葉を伝える活動拠点

Secwepemc Museum & Heritage Park

355 Yellowhead Highway Kamloops BC V2H 1H1 Canada [250-828-9749]

http://www.secwepemc.org/

シュスワップのヘリテイジ

「西部の彼方の西部」と呼ばれるブリティッシュ・コロンビア州（BC）は、カナダ・シールズ（楯状地）がウィニペグまで続き、ロッキー山脈やプレーリー（平原地帯）など変化に富んだ環境の地である。一八五〇年代には、ゴールドラッシュでアメリカからも多くの人々が流入した。太平洋岸のヴァンクーヴァーは、東部の中心的都市トロントから三二〇〇キロメートル、三時間の時差がある。サケを中心とする漁業には、中国や日本などアジアからの移民も多く従事してきた。一八六七年に形成されたカナダ連邦へのBCの参加は一八七一年で、オンタリオ、ケベック、ニューブランズウィック、ノヴァスコシアと鉄道で結ばれたのは一八八五年である。

カムループス市は、BC州の内陸部、平原を流れるフレーザー川の流域にある。「シャウエーム・ミュージアム&ヘリテイジ・パーク」は、町の中心部から川を挟んだ乾燥地にあり、先住民「シュスワップ shuswap」（使用言語からシャウエーム Secwepemc とも呼ばれる）の歴史と現在に関する博物館を中心とするヘリテイジ・パークである。サウス・トムソン川べりの道を歩くと、強い陽射しの中で繁茂する薬用植

物や、二〇〇〇年前の居住地跡（冬期居住用ピット・ハウス、フトイなどカヤツリグサ科の大型湿地性草本でつくられた夏用マット・ロッジ、狩用差し掛け小屋、魚用罠、魚乾燥用棚、スモークハウスなど）を見ることができる。

博物館に隣接して、円形の開放型パウワウ祭（Pow Wow）用あずまや、ヨーロッパ系カナダ人がシュスワップの人々をキリスト教化するために建設した教会や学校寮、カムループス先住民事務所がある。*Secwepemc News* の編集部も同じ敷地内にあり、十七のシュスワップ・バンド（Band）に、シュスワップ・ネイションで行われる議論、ニュース、イヴェントなどの情報を知らせている。

ヨーロッパ人とのコンタクト以前

北アメリカ大陸の先住民の祖先は、アジアから移動してきたとされている。カナダ先住民とは、「インディアン」「メイティ」（フランス系入植者と先住民との間に誕生した人々の子孫）「イヌイット」と記されており（新憲法　一九八二年）、前二者は「ファースト・ネイション（ズ）」と総称されている。現在、シュスワップの土地は五七五キロ平方メートルで、様々な大きさの居留地に分かれており、およそ六五〇〇人の人々が十七バンドを構成している。

シュスワップ（Shuswap、Secwepemc）の人々は、内陸サリッシュ（Salish）文化グループの中でも最大規模とされ、考古学的データによれば、祖先であるパレオ（Paleo）族に遡り、数千年の歴史をもつと推測されている。言葉はSecwepemctsinであるが、他の多くの先住民同様、ヨーロッパ人と出会う以前には文字をもたなかったので、その歴史を再構築するのは困難である。初期の毛皮交易人からの情報や、最も早い時期の詳細な民族誌 *James Teit, The Shuswap*, 1909 があるが、「ヨーロッパ中心的な見方」「少数の人に頼った記述」という批判もなされている。文化人類学者ボアズ（Franz Boas）、ドーソン（George Dawson）による調査も行われてきた。

シュスワップの人々が暮らしていた地域は、BC中南部の十四万五〇〇〇キロ平方メートルに及ぶ。草原、丘、森や山々が広がり、およそ二万一〇〇〇人が住んでいたとされる。シュスワップ・ネイションはいくつかのバンドから構成され、多くは、フレーザー川、ノース・トムソン川、サウス・トムソン川の谷に住んでいた。他の部族と争うこともあったが、交易し、結婚関係を結ぶことも行われていた。

二〇世紀以前は、半遊牧民として、冬期には、半地下に三～四のピット・ハウスから構成される冬の村に住んでいた。男性は上、女性は横の入口からピット・ハウスに出入りすることになっていた。中心に火を焚く場所が設けられ、周りにベンチが置かれていた。他の季節には猟、フレーザー川の魚（サケ）漁、植物採集をして移動して暮らしていた。

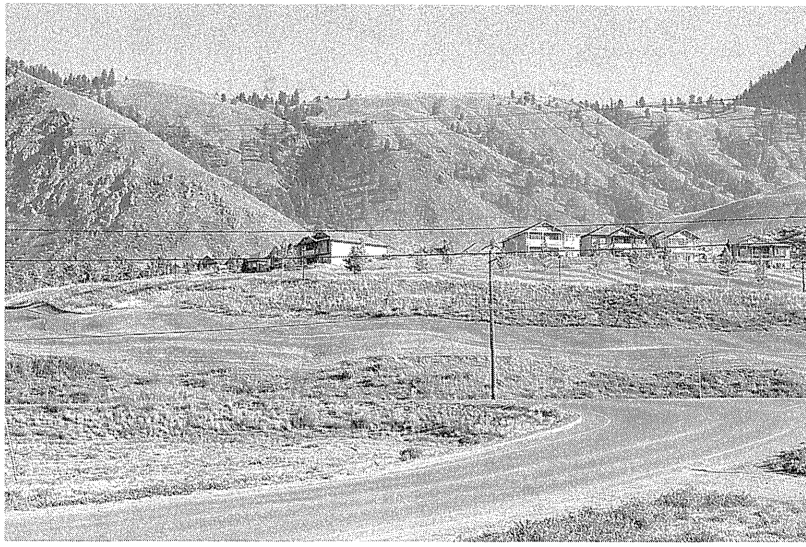
シュスワップの人々が今もしばしば使用するハーブは、砂漠の地に力強く繁茂する植物で、一つ一つがストーリーをもっている。ツルバラ（prairie rose）の枝は宗教的な機会やお守りとして用いられる。セージ（pasture sage）は薬として、また儀式の時に使用される。セイヨウネズ［ビャクシン common juniper］は、悪いスピリットから人々を守る働きがあるといわれる。岩に残された岩壁画（赤黄土）には、守護霊（guardian spirits）も描かれている。

冬の土の住居（女性と男性では入り口が違う。）（2001年8月筆者撮影）

ヨーロッパ人とのコンタクト

北アメリカにヨーロッパ人が頻繁にやってくるようになったのは、一五世紀以降のことである。先住民の暮らしは、ヨーロッパ人との接触によって大きく変化した。毛皮などの資源を目的とした交易者は先住民と交流する場合が多かったが、農牧地を求めてきた入植者は、先住民を排除し不平等なとりきめによって土地を取り上げることもあった。またヨーロッパから持ち込まれた伝染病によって、先住民人口が激減した。一八六二年の天然痘の流行によって、全人口の三分の一の生命が奪われたバンドもある。

一八六七年にカナダ自治領が形成され、カナダ西部へ多くの人々が移住した。移民は、個々の先住民グループと条約を結び土地を得た。一八七六年には、インディアン法が制定され、条約締結に応じたグループには保留地が供給され、主流社会への同化を目的とした様々な方策に従わざるを得なくな



シュスワップの保留地（2001年8月筆者撮影）

った。

先住民をヨーロッパ系カナダ人の文化に同化する目的で設けられた「寄宿学校システム」(residential school system)は、最初の学校が一八〇〇年代初頭に開かれたのち長期に続けられ、最後のものが閉じられたのは一九八〇年代である。一九六〇年代まで、子どもたちは八年生までしか進級しなかったが、先住民の言葉ではなく英語を習得することをはじめ、子どもたちを先住民の文化から遠ざけ「白人文化」に馴染ませる方向性を有していた。一九六〇年代には、先住民のアルコール中毒者が増加し、子どもを親から引き離すことが強調された。二〇世紀半ば以降には、先住民をカナダ化（キリスト教化）する試みのもとで、教会とカムループス・インディアン・寄宿キリスト教学校が設けられ、子どもたちは親と引き離されてトラックに乗せられて収容された。四歳の小さな子どもが親と引き離されることもあり、髪の毛をそられ、シラミを駆除され、先住民の言葉を話すと体罰がくわえられるなど、身体的・精神的虐待を受けた経験とアルコール中毒との関係も指摘されている。後に、現在の赤い煉瓦の建物に変えられた産業学校（industrial school）では、男子は農業を、女子は家の仕事を修道女や牧師に教えられていた。現在、こ

こで寄宿生活をした人々によって当時の状況をまとめる作業が進められている。

一九八六年には総合諸権益請求問題処理政策が採択された。連邦政府の公的声明および三億五〇〇〇万ドルの補償金は、先住民の家族や暮らしを破壊してきたという認識を示すものとされている。一九九五年には先住民の自治を容認する政策が出された。

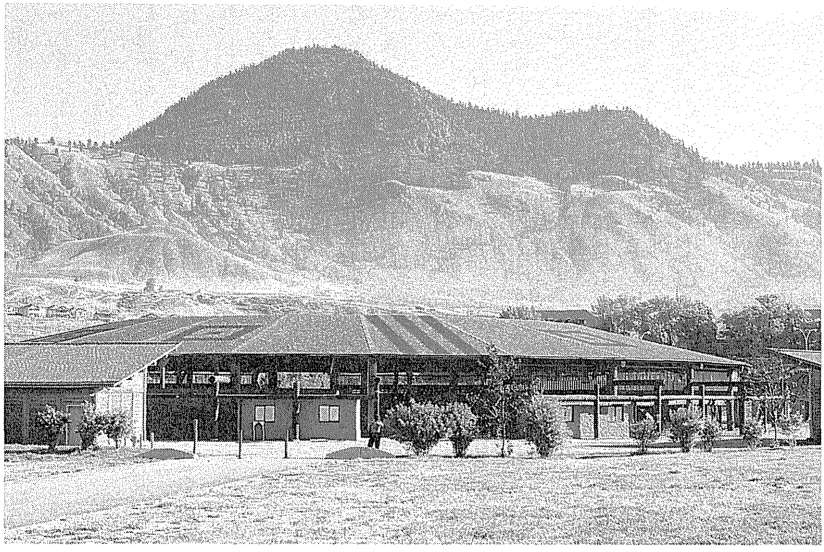
シュスワップの人々の暮らしや文化を問いなおす

近年、シュスワップの人口は増加中である。居留地に戻る者や、家族のメンバーが増えることによる。バンドは、選ばれたチーフとカウンシルが、コミュニティに関することを決めて動いてゆく。一〇〇人以上ものスタッフが、バンドのために、教育、ソーシャル・サービス、健康、税金、資源のマネージメント、公的活動、経済、土地のマネージメント等、経済発展に関わりながら活動している。

寄宿キリスト教学校（2001年8月筆者撮影）

教育は非常に重視されており、居留地内のバンドが管理する“Sek'Lep”スクールでは、州のカリキュラムに加え、シュスワップの言葉や文化を学ぶことができるコースが設けられている。最近シュスワップの人々のあいだでは、生活における重要性や関連性を一言で表現しているという独自の話し言葉を保存し、それをかつては存在しなかった文字を使って表現しようとの試みがなされている。

Secwepemc News の編集部は、十七のシュスワップ・バンドに様々な情報を発信することによって、メンバーが言葉、文化、歴史を知りコミュニティ・メンバーとしての活動について考えることを推進すると同時に、より広く様々な人々がシュスワップの歴史と現在の問題を共有できるような活動の拠点となっている。毎年夏に催されるカムループス・パウワウは、近年、先住民以外の人々も集う祭り及び交流の機会と



1993年に完成した円形の開放型パウワウ用あずまや。アメリカ合衆国南部の先住民から伝えられたパウワウを行うようになったのは最近のことだが、カムループスのインディアン・バンドがorganizeして、毎年8月(の第三週)にこの会場を使って踊りや音楽を含む行事「カムループパウワウ Kamloopa Powwow」が催される。(2001年8月筆者撮影)

しての様相をもつようになっている。関連するものとして、やはりシュスワップ以外の人々が理解を深めるためのSimon Fraser Universityのプログラムがある。二〇〇一年のものでは、シュスワップの言葉や暮らしに関する二週間のコースが設けられ、言葉(家財道具、天気、服、拡大家族、魚と釣具、食物、用具、鳥、動物、植物)や、地域特有の植物がもつストーリーを学ぶことができる。

ブリティッシュ・コロンビア州の往来者たち

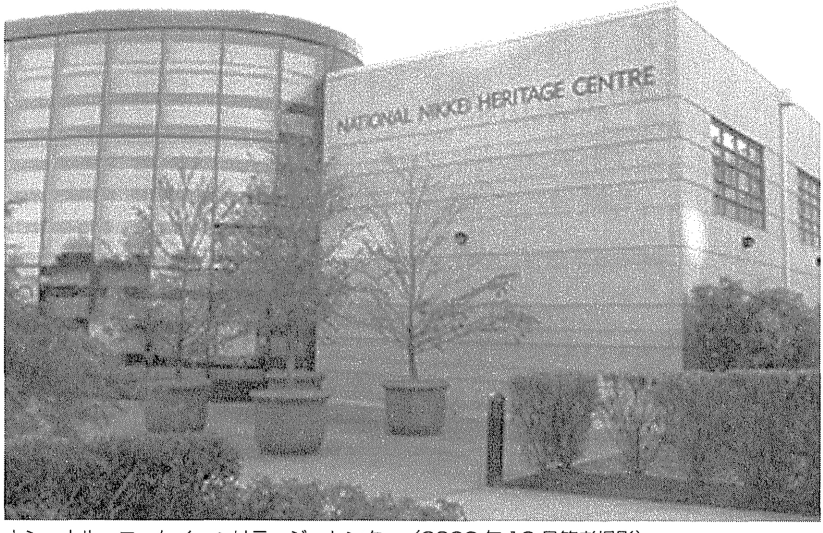
BCには、シュスワップの他にも様々な先住民のグループが移動し、接触し、交流や対立を経験しつつ暮らしてきた。消滅したグループも、新たに誕生したものも、いずれも常に変化の中にある。様々な先住民の歴史や工芸に関しては、「人類学博物館」(ブリティッシュ・コロンビア大学)に展示されている。

赤と黒の鮮やかな色彩のトーテム・ポールで知られる先住民ハイダ(Haida クワクワカワク)は、遅くとも八〇〇〇年前にアジアから移住し、クィーン・シャーロット諸島に住みついた。鮭を主食とし、海岸の大きな木造家屋で暮らしてきた。すべての成員が大烏(ワタリガラス)あるいは鷲の氏族

に属する。ヨーロッパ人と交易し、結核、天然痘に罹患し、一八五〇年には八〇〇〇人であった人口が、二〇世紀には一〇〇〇人以下となったこともある。現在は、一四〇〇人が島に暮らし、七百人が都市部で生活している。一九五〇年代には、トーテム・ポールが「芸術」として注目されるようになり、「トーテム・ポール救出隊」が、ハイダ族の家とトーテム・ポールを復元した。一九八〇年には、ハイダの母とスコットランド系アメリカ人の父をもつビル・リードの大烏像の除幕にチャールズ皇太子も訪れ、「ハイダ・ルネッサンス」が謳われる一方で、「ハイダ芸術と商業主義の関係も議論された。

一九世紀のゴールドラッシュ時には、鉄道が開通したこともあり、多くの白人がカナダ東部やアメリカ合衆国から流入した。ヴァーノン（オカナガン）のオキーフ牧場（O'Keefe Ranch）は、木で作った小さな教会を中心としてつくられた牧場を保存した野外博物館である。料理人として働いていた中国人が居住していた、やっと二人が寝られる小さな小屋も残されている。

太平洋側のヴァンクーヴァーには、中国人や日本人なども職を求めて移民した。日本からの移民は、九割以上が主とし



ナショナル・ニッケイ・ヘリテージ・センター（2006年10月筆者撮影）

てサケを扱う漁業や林業に従事した。日系の人々が集住したスティーブストンには歴史協会が設けられている。第二次世界大戦時には日系人の財産没収、本国送還、強制移住が進められ、東部やカムループスに移動した者も多かった。カナダ政府は、一九八八年に補償金を支払い公式に謝罪した。一九八〇年代以降、こうした補償金をも資金として日系の高齢者に配慮した住居やナーシングホームがヴァンクーヴァーやトロントで設立された。ヴァンクーヴァーでは、高齢者用住居、ナーシングホーム、博物館とイヴェントホールを有する日系ヘリテージ・センターの統合施設が、"Tonarigumi"(「隣組」)と同様に、ミーティングポイントや日系の人々とカナダの多文化社会との関わりを考える拠点となっている。

現在、多文化主義を標榜しているカナダだが、先住民が経験した変化と現在の暮らしの問題は、他のグループの歴史やカナダ社会の特徴の一側面を照射するものといえよう。

【鈴木七美】

【推奨参考文献】
岸上伸啓「北アメリカ先住民社会の現在」千里文化財団『季刊民族学118　北アメリカ先住民社会の現在』(二〇〇六年)
鈴木七美「病の人類学」「癒しの人類学」『文化人類学――実践的知の探究』(放送大学教育振興会、二〇〇四年)
Parish, Roberta, et al., ed., *Plants of Southern Interior: British Columbia and the Inland Northwest* (Lone Pine, 1996)
Secwepemc Cultural Education Society ed., *Behind Closed Doors: Stories from the Kamloops Indian Residential School* (Secwepemc Cultural Education Society, 2000)
Wolf, Annabel C. E., *Shuswap History: A Century of Change* (Secwepemc Cultural Education Society, 1996)